



巻頭言

宿舎 修空館館長

小野寺 脩

神戸の人たちは、19年前の阪神淡路大震災で『東北人に助けてもらった!』とボランティアに来てくれます。毎月、定期のこの活動により、今後(もしも)20年、30年先に日本のどこかで何かあっても、今度は東北人が

力を発揮します。北から南まで、同一民族の日本は、知らない人でも助け合うことのできる素晴らしい国だと、地域の子供たちもいつか誇りに思うことでしょう。
日本地図を人体に置き換えると東北は心臓部、大事などころの回復で全国の人々の生きる力に繋がります。ボランティアの尊い姿に心より感謝いたします

炊き出し、就労について、村田充八理事からも「共農支縁」など種々のネーミングが出され、話し合いました。最終的に、水垣渉理事が発題された「耕」支縁を理事会で採択しました。(2014年4月26日)
毎週、機構の東北ボランティア参加者の有志は、神戸市東遊園地「市役所隣」の炊き出しに繰り出します。

生活をしている人」や「野宿者」と呼ぶようにしています。
就労として、機構は自分たちが契約している神戸市西区の畑で共に土を耕し、作物を栽培し、収穫したものを食べていく自産自消、「自分で作って、自分で食べる消費する」を目指します。衣食住の住居以外を、自分たちでまかないます。
森岡忠義氏、岸本豊氏(第11、19次)の寛大なご尽力により、野菜づくりと、おいしい安全な食べ物とをいただくことができます。
もし不足する場合、たとえば食材などは他のNPOや、団体と協力し、補っていくようにします。
仕事に就くことで、勤労の喜びを見出します。
無農薬、有機による栽培は従事する人たちの尊厳を保ちます。機械をできるだけ用いずに、田植え、雑草刈り、稲刈りなどの協同作業をします。だれしもが、一次(生産)二次(加工)三次(販売)六次により、生活、仕事、家庭が支えられるように目指します。

「Let's 農林漁」の保田茂先生はいつも言われます。(毎月第4土曜日午前10時)「有機農業とは天機あり。大自然には自然を壊さないでうまく循環させる仕組みがある。自然に対する認識を深める。」
保田講師の農学校で学ばれた岸本豊さん(画像左端)が若者たちの耕作について導いていきます。

将来への課題があります。「路上で生活をしている人」たちの寝る場所がまだ確保できていないことです。
反収あたりの経済効率、効率を追求める農業に決別を告げましょう。農薬、化学肥料は日本人の健康を損なうばかりか自然生態をだめにしていきます。機構は「田・山・湾の復活」を目指します。里山、里海主義です。米国「Fortune誌」の調査中小企業白書では会社の寿命は5年程度です。就労では、就農、就漁、就樵により、日本の豊かな自然、資源、エネルギーを活用する郷土にしましょう。



左から 岸本豊さん、山本勝さん、村上裕隆さん

ける耕作、お互いに支え合って、つながりの縁を大切にするように、神戸国際支縁機構は引き続き汗を流します。

「耕」支縁

山本 智也

「耕す」(英語の culture はドイツ語 Kultur ラテン語 cultura)に由来。語源の「colere」は「住む、耕す、世話をする、育てる、崇拜・礼拝する」の意があります。「care(世話をする)」の語源にもなっています。「農業(英語 agriculture)」の「agri(畑、野)」+「culture (cultivation 耕作)」からできた単語であり、「畑の耕作」の意です。哲学者キケロ(紀元前106、紀元前43)は「魂の耕作が哲学である」と述べました。「耕す」とは土・文化・哲学・宗教に働きかけることです。労働として土に働きかける耕作、お互いに支え合って、つながりの縁を大切に、神戸国際支縁機構は引き続き汗を流します。

読者の心は

「分け隔てを乗り越えて」

岩村義雄

かつて、公園や路上で生活している人は「野宿者」呼ばれていました。最近では「ホームレス」と呼ばれるようになりました。しかし、災害を失った被災者を「ホームレス」と呼ぶことは、彼らを「ホームレス」として扱うのではなく、彼らが「ホームレス」になった理由を問うべきです。阪神淡路大震災の時、公園や路上で生活していた人たちが、路地裏で生活している人たちが、

「キリスト新聞」(2009年6月27日付)

「路上で生活をしている人」(英語 Bag people)の身の回りの物を紙袋に入れて持ち歩く様子から「が日雇いの労働者として、就労できるようにお手伝いさせていただきます。ホームレスという言葉を使いません。なぜなら、英語でも Homeless と言えば、キャンプなど野外生活を楽しむ人たちの場合にも用いるからです。したがって、機構では、「路上で

林業ボランティア(その一)

本田 陽太郎(第16、23、36次)

●脱臭炭の製品作り●

東日本大震災の復興として石巻の森林組合(鈴木健一組合長)は伐採した木で子ども用椅子などの木工品などを女川町に寄贈してきた。日本は国土のうち3分の2が森林面積である。長年手をつけていない里山は資源の宝庫である。電気やガスの普及で炭焼きは見かけなくなりつつある。しかし、ストーブやボイラーで燃やす炭、薪は大いに役立つ。2012年3月、自然エネルギーのため岩村代表より班長として指名され、石巻森林組合へ行くこととなった。同じ班には研究者、社会人、学生たちで構成されている。機構は養蚕や竹伐採、間伐伐採はしてき

たが、「炭焼き」ははじめてであった。

石巻市真野字七の坪にあるウッドサイクルセンターで、所長の大内伸之氏の指示に従い、ドラム缶に入っている粉々の炭を不織布の袋へ詰めた。それをビニールの袋に入れて脱臭炭として使える製品を作った。

●炭焼き●

2日目は、森林組合山下俊一氏の案内で石巻市沢田志の畑にある炭焼き小屋に向かった。窯は国道398号線から脇道に入り、徒歩で10分にある。周囲を山に囲まれ、自然の中にあることが気持ちいいのだが、杉に囲まれているため花粉症の仲間には辛そうだった。

窯の管理者の阿部初吉さん(79歳)と木村貞一さん(77歳)と挨拶もほどほどに、お二人のご指導のもと、1週間ほど前に火をつけ、出来上がった炭を窯から地道に1本1本取り出し、隣の小屋に立てて並べていく。窯の入り口は大人が四つん這いになってやっと通れるほどの大きさであり、窯の中は立ち上がることもできないほどの低さだ。そのため作業のほとんどは中腰か膝を立てての体制となる。中は炭の粉が立ち込めてカメラで中を撮影してもフラッシュの光がほとんど差し込めず壁まで撮影できないほど、もうとうとした状態だった。持参し



奥の三角屋根が窯。窯から出した前後は左の小屋に保管、中央の木材は乾燥させた木材。この木材は窯の中にすべて入れた。

た不織布のマスクでは2重にしてもほとんど役に立たず、咳き込むこともしばしばあった。窯の外で光にあたると、顔は炭で真っ黒で、爪の隙間も炭で真っ黒になっていくことに気が付き、みんな笑い合っていた。慣れない体勢で腰も痛く、思った以上に重労働だと思ったが、阿部さんも木村さんも顔色ひとつ変えずに作業されていた。その上、炭の粉が体に良くて病気に知らずだと笑いながら言う顔は印象的であった。

出し終わったら、今度は次の炭を作るための木材(長さ約1m、太さが直径10〜15cm程度に切断されたもの)を窯の中へ入れて、1本1本立てて並べていく。木材の上部から窯の天井までの間には短い木材を載せて隙間を埋めていった。窯の中をすべて木材で埋め尽くし、窯の入り口に管を設置し空気穴を設けて上から土で盛り、火を付けた後は外からすることはあまりないが、まったく手放して放置できるわけでもないらしい。窯の中で木材が燃え尽きてしまうのではないかと考えてしまいが、新鮮な空気が入っていきにくい構造の窯なので、自然消火して、イメージとしては蒸し焼き状態のようで熱が下がってから窯出しするようだった。



窯の内部を入り口から撮影。木材ほとんどを並べている。頭の上はほとんど天井につくぐらいである。



左から 下司聖作さん、本田陽太郎班長

火を付けてから炭が出来上がるまでには数日かかるが、具体的にどれくらいかかるのかは、窯の湿気や木材の乾燥具合により左右されるため、一概には言えないそうである。また、夏と冬では窯の湿気が異なるため、炭焼きをせずに休止したり、木材の乾燥具合を調節したりすることもあるそうだった。

●利用している木材と活用方法●

炭や薪として加工するために使用している木材は、津波被害のあった住居などを高台に移転するために伐採したものも含まれていて、主にナラの木やクスギの木だそうだった。この炭焼き場には2mの長さに切ったものが運ばれてきて、炭焼き場でさらに1m長に切断し乾燥させるそうである。

東ねた薪は乾燥して、家庭用暖炉の燃料や一部のこだわりのお店で使用されるそうである。また、炭焼きで出来上がった炭は、十分な長さのものは炭として短いものの細かいものは袋詰めした消臭炭として使われるほか、バイオマス発電でも使用される可能性もあるそうだった。バイオマス発電とは、植物や動物の排泄物などの有機物(バイオマス)をエネルギー源として利用する発電方法である。石巻森林組合代表理事の鈴木健一さんに伺ったところによると、計画されているが何年も継続するためには、狭い面積で急な勾配の山が多く大型重機で木材を伐採できないという地理的な問題、同じ量を同じ価格で納入できないといった安定供給に関連する問題、労働賃金の問題などの課題があり、計画を推進していくのも簡単ではないそうだった。しかし、東日本大震災後には原発問題も湧き起っていることや、資源の有効活用ということからも、是非実現されるといいなと素人ながらに思った。

炭、薪がアウトドアのバーベキューや、ストーブの燃料に販売される。やがて燃えた後、灰が落葉などと共に田んぼに役立つ。僕らの森は生きていることを実感する。(次号に続く)

連載「むかし、むかし」(その一) (石巻歴史探訪) 阿部 捷一

坂上田村麻呂伝説で名高い牧山から、東方に伸び渡波方面に連なる山々があります。北から大棚山、垂水山、立石山と続きます。むかし、秋の刈り入れの季節月夜の晩になると大棚山の方から牝鹿を呼ぶ牝鹿の音が聞こえてきます。季節の夜になるとあまりに熱心に呼び交わすので、「鹿が鳴くので仕事をやめよう」と里人は、家路についていた。ところがある日、自分慢の若い男が一頭の牝鹿を狩り、自慢していました。しかし、その夜からは、牝鹿が立石山に向かって鳴き続けた。牝鹿の鳴き声は、夜毎に細り、やがて息絶えました。里人も大いに悲しみ、牝鹿の骨とともに葬り、松の木を植え、目印としました。今も牝鹿の里を鹿松、牝鹿の里を鹿妻と呼ぶのは、この故事によるものだそうです。一説には、牝鹿半島牝鹿郡の名はこれから生まれたとも伝えられています。過ぎし日のロマンでしょう。

株式会社 チュチュアンナ
代表取締役社長

上田 利昭

tutu.anna™

MIYOSHI

ミヨシ石炭株式会社

〒130-0021
東京都墨田区緑3-8-12
TEL 03-3634-1341

竹中工務店

www.takenaka.co.jp

SERVING MANKIND

Humanity First

「ヒューマニティファスト」
日本アハマディア・ムスリム協会

傾聴ボランティア

吉川 潤

「佐藤芳郎さん」

3月11日当日、佐藤芳郎さん（68歳）は女川へ仕事に出ており、妻征子さん（65歳）は石巻市浜松町の家にいました。天井の20cmくらい上まで津波は迫りました。「ここが水の高さです」と指さした2階への階段の一番上から一つ下踏み面まで、黒い津波の跡が残っていました。

芳郎さんは、金華山の観光船で機関長として運航業務に従事していました。海の様子を残した写真を見せながら、「天童よしみの珍島物語の歌詞に、海が割れるのよって一説あつちや、あれと同じですよ。」と傾聴班の私たちを居間に招き入れ語ります。ちょうど日本経済新聞の川上寿敏記者も代表といっしょでした。

「午後2時35分頃、船の底から大型バイクがうなっているような地鳴りが20秒ほどしました。女川の山並みを見渡すと、山が崩れる勢いで揺れていました。直感で津波が来るとわかりました。すぐに20トンの旅客船（60人乗り）に船長と2人で沖へ向かいました。水深が浅くなると津波は高くなるため、沖へ避難したのです。2日間沖合にいました。船内にあった少量の水と、乗客用に販売するお菓子を分け合って過ごしました。津波警報が解除になった13日、女川観光桟橋に船を接岸したところ、会社の事務所、隣接する旅客待合所は津波に流され、跡形も無くなっていました。車も流されており、歩いて渡波の家に向かいました。途中の惨状に、『家族や親戚もみんな死んでしまつたちゃ』とよぎりま



現在の石巻市浜松町

を呼んでも、返事はありませんでした。渡波小学校校舎の3階の教室で、足の踏み場のないごたがえした中に妻たちを見つけ、再会を果たしました。」

妻は、息子（35歳）と孫（当時小学校5年）といっしょに難を逃れました。勤め先からちょうど早番で帰宅していた息子（35歳）が、5年生だった孫を小学校まで車で迎えに行き、自宅に帰ってくるのを待ち受けていたちょうどその時、征子さんは山のような津波が前の家の横から見えました。後部座席に飛び乗るやいなや、車は物置の上を越え、流れてきたがれきといっしょに、家の裏の空き地をぐるぐると渦を巻いて回りました。助手席に乗っていた孫は「死ぬんでねえか、死ぬんでねえか！」と叫びました。征子さんは恐怖のあまり外を見ず、金縛りの状態でした。「洗濯機の中で振り回されているようで、このまま止まらないのではと恐ろしかったちゃ」。車は、鉄工所のがれきに突っ込むようにしてやとと止まりました。息子が車の窓を壊し、やつとの思いで3人共、脱出しました。雪が降っていました。腰まで水に浸かりながら、震える3人を家の2階に迎え入れてくれる近所の親切によつて救われました。2階でお菓子などを分けてもらって一晩過ごしました。翌朝には、着の身着のまま渡波小学校の3階へ避難しました。町の光景は、さながら戦争当時の写真のような光景でした。

征子さんは、不整脈、変形性膝関節症などの持病もありました。送迎で息子と孫が戻つて来なかったら、隣人の助け合いがなかったら独りで死んでいたのです。間一髪でした。「学校はなんで生徒たちを帰したんだかね、小学校は避難所なのに」。津波のことは（みんな）頭にないんだよね」と不思議な巡り合わせを話されます。

隣も、ご夫婦共々が津波の犠牲になり、反対側のお隣も臨月を迎え里帰りしていた29歳の娘さんが波に吞まれました。津波が引いた後、その娘さんの結婚式の引き出物だったどんぶりだけが残っていました。「形見みたい

に残ったことが不思議で、悲しい」と父親（60歳）はぼつりと言います。ほとんどの家が全壊になり、浜松町でも40名以上が亡くなりました。みんな知り合いです。「心に穴が空いたようちゃ」と生き残った者の気持ちです。

傾聴ボランティアを続けて、痛いほどわかることがあります。

家族、親戚、友人など大切な人を突然亡くした悲しみはいつまでも癒えません。体験した者にしかその哀しみ、苦しみ、くやしさはわかりません。建物や道路などの復興が進んだとしても、元気に成長したご近所の子どもさんを見ても、しあわせを素直に喜べない複雑さがあります。時間は止まったままなのです。だれも元通りにできません。私たちは何もできませんが、共に苦しみ、泣く苦縁のため毎月、訪問を続けます。

1 参考資料「船

員新聞」（第

2656号、地

震と津波はワ

ンニング機関

長（佐藤芳郎）。

(社)神戸国際支縁機構

・ボランティアや移住者募集中

毎月、被災地へ赴きます。農林漁、および在宅被災者戸別訪問にご協力ください。医療関係者歓迎します。詳細はホームページ。

・被災地への支援物資もお願いします。

・年会費をお願いします。

会員（年度4月～翌3月）の皆さまには、季刊誌などをお送りします。

事務局長 本田 寿久



TAMANOHADA

代表取締役 三木 晴雄

〒130-0021 東京都墨田区緑 3-8-12
tel 03 3634 1345 fax 03 3635 4124
URL: www.tamanohada.co.jp

法律相談初回無料。
お気軽にご相談下さい。

宮永法律事務所

みやながたかし 弁護士 宮永 亮史
まつたやすお 弁護士 松田 康生

〒650-0016 神戸市中央区橋通1-2-14

☎0120-997-181

TEL 078-351-1325 FAX 078-351-1270



夢に近づく
夢を産み出す...

近畿産業信用組合

総合コールセンター

0120-111-019

特定非営利活動法人

みもぞ

TEL 078-262-0460

医療・保健介護・
福祉・教育に関する事業
共生社会の実現

不動産 売買・賃貸・管理・店舗は

本田商会

〒662-0051 西宮市羽衣町5-23

電話：0798-38-7560

FAX：0798-38-7561

お気軽にご相談ください。



ヤマザキ

世界のパン
ヤマザキ

(第38次参加者、勝村弘也)